

隠さずに生きる未来を

佐渡市立新穂中学校 3年 山口 真央

私には、大切な一歳と四歳のいとこがいる。今のご時世、会うことが難しく、なかなか会える機会がなかったが、今年の七月にやっと会えることになった。一歳のいとこは初めまして、四歳のいとこは三年ぶりの再会で会える日を待ち遠しく思っていた。会えなかった期間は、よく写真や動画が送られてきた。食べている様子や遊んでいる様子、どれも年の離れている私からすれば、成長していく姿が見られて本当に嬉しかった。

そんなある日、四歳のいとこがあまり話している様子が見られないなと思い、祖母に

「しゃべらないのかな。」

と尋ねてみた。すると、

「何か〇〇（四歳のいとこ）のお母さんが言ってた？」

と聞かれ、その質問が理解できなかった私は

「何も言われてないよ。」

としか返せなかった。私は幼児に対する知識が少ないため、これからたくさん話せるようになるのだろうと思っていた。

いつものように家族で食卓を囲んでいたある時、

「あまり言わない方がいいんじゃないか。」

と祖父が言っているのを耳にした。何の話だろうかと疑問に思ったが、会話の流れがつかめておらず、子どもが聞かない方がいいことなら黙っておこうと祖父に聞き返さなかった。すると祖母が

「〇〇（四歳のいとこ）が障害を持っているんだって。」

と話してくれた。私は、障害を持っている人に対して、偏見を持ったり、違う目で見たりすることは良くないことだと思っていたので、祖母には

「そうなんだ。」

の一言で軽く返した。また、いとこのお母さんからも

「中度知的障害を持っているんだ。体は健康だけれど、知的的には一歳から一歳半で脳の発達が遅れているんだ。」

というメッセージが送られてきた。私は障害を持っている人に対して、違う目で見ないと自分に言い聞かせたものの、実際その話を聞いた時、頭の中が混乱していた。身近な人が障害を持っている事実。祖父が言った「あまり言わない方がいいんじゃないか。」という一言に対する様々な感情。私には聞かない方が良かったことなのか。隠さなければいけないことなのか。

それから私は「知的障害」というものについて調べてみた。すると、「四歳ごろ見ら

れるものは、言葉は分かるが、会話ができない。質問にうまく答えられない。」というようなことが書かれていた。私はその時、とても不安になった。いとこと遊んだり、話したりできることを楽しみにしていたのに、私が言った言葉を理解してくれないなんて寂しい。そんな気持ちが込み上げ、楽しみにしていた再会が緊張に変わった。

ついに、いとこと会える日が来た。私と会ったらどんな反応をするのかなど、色々なことを考えたが、そんな不安は一気に消えてしまった。一歳のいとこよりは話す言葉の数が少なく、自分が伝えたいことを言葉ではなく、態度で示すなど少し発達が遅れているんだなというのは感じた。しかし、周りの子どもと同じように遊ぶし、たくさんご飯も食べるし、私が心配していたことなど感じられなかった。

それから、「障害がある」ってそんなに隠さなければいけないことなのかと考えるようになった。祖父が言ったあの言葉を鵜呑みにして、障害を隠す生活になるのであれば、障害を持っている本人やその家族は、これからどんな大変な思いをするのだろうか。目に見えない障害なら、なおさらだ。もし、いとこが遊びに来る前、障害を持っているということを知らずに、周りの子どもと同じように会話をしようとしていたら、どうなっていたのだろうか。無理やり話させていたかもしれない。しかし、「障害がある」と教えてもらったことで、適切な距離を保ち、お互い嫌な思いをせずに過ごすことができた。また、それは障害を持っていない人でも同じだ。人には得意、不得意がある。もし、自分の不得意を隠して生活していたら、きっと、自分に大きな負担がかかってしまうだろう。

今の世の中には、障害を持っている人でも快適に過ごせるような工夫がある。しかし、目に見える身体障害だけではなく、目には見えない精神障害や知的障害を持っている人もいる。目には見えないから、周りは気づきにくく、差別的態度をとる人がいるのだと思う。だからこそ、自分や家族の障害を隠すのではなく、周りに堂々と協力を求める声が増えてほしい。そんな社会を創っていくためには、私たち一人一人がお互いを認め合い、助け合っていく必要があると思う。

誰もが安心して生活できる未来が訪れることを心から願う。